往復連載

ドーバー越えて

齋藤敦子
中野香織

服飾史家である中野香織さんと、映画評論家で字幕翻訳家の齋藤敦子さんの往復書簡的コラム。ファッション誌の映画コラムニストとフランス映画社宣伝部員として出会った中野さんと齋藤さんは、以来10数年、友情を育む。この連載では、イギリス文化とフランス映画という専門分野をベースに映画談義が交わされる。

中野香織 ㉒ 適者生存

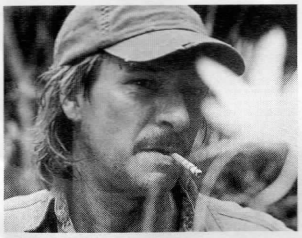
「アダプテーション」、見てきました。敦子さんごひいきのクリス・クーパー、いいじゃないですか！　前歯なしインテリ野生児のフェロモンはただごとじゃない。メリル・ストリープじゃなくてもくらっときますよ。

なんて今さら騒いでいるにわかクーパーファンの増殖をふっふっふっと高みから見下ろしてらっしゃるでしょう？　なんてったって、敦子さんは〈「評決のとき」で足を撃たれた警官〉時代のクーパー（覚えてませんよ、そんなもん）からすでにチェック済みなんですもんね。先見の明、おそれいりやした。

それにしてもヘンな映画でした「アダプテーション」。ただ悶々と〈脚色が書けない〉時間が過ぎるばかりでどうなるのかと思いきや、結局、最後の土壇場でとってつけたように〈覗きとカーチェイス〉〈ドラッグ&セックス〉〈モンスターの急襲〉〈パートナーの喪失〉〈主人公の成長〉という非現実的な出来事がたたみかけるように起こって、ようやく「アメリカ映画」っぽく盛り上がるという皮肉。「主人公が成長なんかしない話」を書くはずだったカウフマンがアメリカ映画界に「適応（アダプテーション）」して生きていくためには、やっぱりこうしたアメリカ人好きする要素を取り入れねばならなかったってこと？

そういえば、この映画の中にも出てくるダーウィンが「種の起源」（1859）で唱えた「適者生存（survival of the fittest）」って、当初と現代では〈意味〉が大きく変わってるんですよね。大英帝国最盛期の十九世紀には「最強の者が生き残る」と解釈されて、植民地拡大を後押しする理論にもなってたんだけど、イギリスがへなへな状態になって以来、「環境の変化に最もよく適応できる者が生き残る」って読み直されたんです。

で、「最強の者が生き残る」時代のイギリスが舞台の映画、「サハラに舞う羽根」（ようやくここまで話をもってこれた）。臆病者は（社会的に）抹殺されても当然だった時代の話ゆえ、抑圧感というかやせがまん感、さらにそんなソサエティを機能させる役割演技感が登場人物たちには必須なのに、オーストラリア人のヒース・レジャー、アメリカ人のウェス・ベントレーとケイト・ハドソン。みんな表裏も屈折もなくまっすぐなもんだから、もう大英帝国の陰影に彩られた薫りとはぜんぜん無縁な、アメリカンなコスプレ青春映画になるしかなかったですねえ。とはいえ大英帝国の薫りなんて遺産も、生き残ろうと思えば、アメリカ好みの映画環境に「適応」するしかないのが現状でしょうか。



「アダプテーション」●8月23日よりシネマライズほか全国にて

カット・井上陽子